

自ら選ぶ道、 困難も夫婦なら さらに面白し

山形県庄内地方は、稲作地域にあって水田はわずかしかない。
他人から見ればハンデと思われる経営条件にいればこそ、畑作農家として成長した叶野幸衛。

その農業経営者としての生き様は、誰に頼まれるからでもなく、
自らやりたい道を疑問なく突き進み成功する経営者の典型的な姿ともいえる。

取材・文／昆吉則 撮影／北川奈津子



「その山があるから」

山形県鶴岡市（旧表記では東田川郡藤島町）にある叶野幸衛（57歳）は、自宅の玄関先から月山の頂上まで全行程を歩いて登ったことがある。夜中の12時に出発し、頂上に着いたのは夕方5時。約17時間かかった。雪のない季節ならもっと短時間かもしれないと叶野は言う。庄内農業高校定時制4年の春、スキーにテント、それに数日分の食料など60kgの荷物を背負っての単独行だった。

なぜ、そんなことをしたのかを尋ねると、叶野はとぼけた顔をして、でも少し嬉しそうに言った。

「やって見たかったから」

英国の登山家ジョージ・マロリーが、なぜエベレストを目指すのかを問われて、「そこに山があるから」と答えたという逸話がある。他人から見れば、およそやろうと思わないことに一所懸命になり、そしてそれを達成した者に、人は拍手を贈る。そこに人生のロマンを感じるからだろう。人がこの道と定めた人生を歩むことも、ただ頂上を目指すことと同じなのではあるまいか。経営者になることもまた同じである。

人が経営者として何事かを始めるのは、ただ何事かを実現したいと思

自ら選ぶ道、困難も夫婦ならさらに面白し

えはこそのことである。誰かに頼まれるからではない。ただやりたいからやるのだ。事業である限り利益は必要であるが、彼にとってそれは目的というより、夢の実現のための手段であり、結果に過ぎない。むしろ、そんな強い思いを持つ者であればこそ自ら学び、また、そんな彼には人の助けも与えられるものなのだ。叶野の農業経営者としての人生にはそれが見える。

初めてのジャガイモ作り

筆者が叶野に始めて会ったのは、1995年の7月。旧藤島町内に住む本誌の読者グループが開いた集まりの時だった。庄内平野の典型的な水田地帯である同地域。集まったメンバーは水稲あるいはそれに園芸を加えた経営の人ばかり。そのなかにひとり、叶野だけが羽黒山の山中に開かれた畑で野菜を作る畑作農家だった。

驚いたことに、同じ町内の事業的農家でありながら、叶野はほかの人々と親しく口をきくのはそれが初めてだと言った。叶野は決して人を拒むような人物ではない。彼の住む集落がかつて別の農協に属していたことや、作目の違いもあるのかもしれない。それより、ひとりでもわが道を行くという、強い独立自尊

の精神が人を遠ざけていたのかもしれない。

その席で叶野はポテトハーベスタの導入について相談に乗ってほしいと言ってきた。当時、筆者は府県での北海道型体系による契約ジャガイモ作りを推奨していたからである。叶野が得ていたポテトハーベスタに関する

情報は、本誌に紹介される記事や広告だけ。それを頼りに北海道のメーカーからカタログを集めていたが、ポテトハーベスタなど見たこともない。取引している農機具店からは、サツマイモ用に販売され始めていた松山(株)のポテカルゴをテストしてみようと勧められているという。

だが、今でも府県の農機店では、大型体系のポテトハーベスタに関して知識のある店などほとんどない。ポテカルゴで4haのジャガイモの収穫作業体系をどうやって組み立てる

野菜農場叶野 叶野幸衛

山形県鶴岡市

かのう・こうえい ●山形県生まれ。庄内農業高校の定時制を卒業後、一度は就職。1975年に実家の農業を継ぎ、タバコ作で畑作農家としての人生を始める。その後、約10haの畑でジャガイモ、ニンジンなど畑作野菜の栽培に取り組む。



というのだ。作業能力の限界はともかくとして、その後のジャガイモの搬送の問題は考えに入っていないのだろう。「茨城に北海道のハーベスタを持っていく人がいます。それを貸してもらおうように頼むから、ともかく頼んでいる機械は止めるべきです」

それがその時の筆者の助言だった。しかし、ハーベスタの準備もないままに4haのジャガイモを植え付ける叶野。無謀にも思えるが、見る前に跳べるような叶野の人柄に触れて嬉しくなったのを覚えている。

叶野に連れられて行った畑を見てさらに驚いた。イモ作りはほとんど初めてだというのに、傾斜のある山の畑約4haにジャガイモが一面に花を付けている。その植え付けは、鋤柄農機(株)の管理機用ポテトプラントをトラクタのツールバーに2つ着け、2畝にして植えたのだという。

管理機用のプラントなら種イモを入れるホップも小さい。4haの傾斜畑で何回種イモを補給したのだろうか。多分、叶野の妻・明美(55歳)が種イモを入れた容器を抱えてトラクタの後を追いかけてながら供給したのだろう。

さらに苦労があった。茨城の読者である石川治男から機械を借りることはできた。茨城の収穫時期は7月下旬。山形の山の上なら収穫はお盆前後から。機械のリレーができる。石川は機械を貸してくれただけでなく、ハーベスタを使うためのローックロップタイヤの購入にあたって、安く調達する機械屋との交渉をしてくれた。

しかし、筆者が迂闊であった。ハーベスタは借りることができても、大型ハーベスタで使う大コンテナの準備が地元ではできなかったのだ。叶野はハーベスタの排出コンベア後にミニコンテナを重ねて置き、そこにイモを受けて収穫していったという。それを人力で荷役したわけだ。大変な重労働であったはずだ。

しかも、初めてのイモ作り。よほど砂地の土壌でない限り、初めてポテトハーベスタでの収穫をみると、ほとんどの人が土塊に悩まされる。植え付け前に碎土率を良くしておくというのが、ハーベスタ収穫の鉄則

なのである。砕土が悪いとコンベアに上がる土塊が多くなり、イモの選別どころではなくなるからだ。

でも、それは経験者の指導がなければ想像のつかないことだ。あの叶野夫妻でなければ、きつとくじけて収穫を放棄してしまっただけではないだろうか。

収穫が終了したのは10月の中旬になってからだった。そこまでイモが腐らずによく持ったものである。

この逸話のなかに、叶野の農業経営者としての成功の理由が示されていると思う。

そもそも叶野は、タバコの生産者として何度も日本たばこの表彰を受けるような農家だった。一時は1・2 haまでタバコの栽培面積を増やしたこともある。やがて経験を積んで土壌管理を徹底し、栽培技術も高めていくうちに、50 aに縮小してもかつてに勝る高い収益を挙げられるようになっていった。

にもかかわらず、叶野はあっさりタバコを止めてしまう。彼は日本たばこの担当者が引き止めに入ったほどの生産者だった。

叶野がタバコを止めると決めた理由は、タバコ作りの忙しさもあるが、「人を不健康にする作物を作るのは農業者として選ぶべき道ではない」ということだった。

それが叶野の農業経営者としての「経営理念」というべきものだろう。**やると決めたらトコトン**

筆タバコを止めようと考えていた矢先、農協で生協からの発注があることを聞いて始めたジャガイモなのである。大変な苦勞をしたが、その年も叶野は生協と市場出荷で4 ha分のイモをすべて売り切った。

やると決めたらトコトンやる。経営情報を集めるのに叶野ほど熱心な農家も少ない。本誌の研究会をはじめ様々な研究会に参加し、詳しい人



①叶野は町が企画する消費者招待の場にジャガイモ畑を提供する。②かはつてはタバコ農家だったが、叶野はそれをあっさり止めた。③④叶野のポテトハーベスタ。⑤3月初旬、山の畑はまだ雪に埋もれていた。(写真提供/叶野幸衛)

がいれば教えを乞いに訪ね歩く。自らも試行錯誤をし、必要な投資も惜しまない。そして、一旦始めたなら、どんな困難にもめげずにやり抜く。困難とは後で思い返すものなのであり、渦中にある本人は目的の達成に夢中になっており、その困難さすら気付かない。

後日、叶野夫妻にその大変さを尋ねると、二人は顔を見合わせて笑うだけだった。夫唱婦随というべきなのか、明美もまた、そんな人生を困難とは思わない、似た者夫婦というべきなのだろう。

二人が一所懸命になるのは家の仕事だけでない。藤島の農家グループは毎年、東京・練馬の光が丘団地で開かれるイベントにくる。そこにも毎年欠かさず夫婦で参加する。夫婦揃って精一杯働きつくしているというのが、筆者の見てきた叶野夫妻なのである。

現在は3・2 haのジャガイモと1・5 haのニンジンとを、契約した鶴岡市内4カ所の給食センターを中心に、量販店や業者に通年出荷するのが経営の中心になっている。そのほかにも、やはり契約の形で枝豆1・2 ha、赤カブ1 haなどを栽培している。以上の基幹的作物に加えて、アスパラガス、タマネギ、辛味ダイコン、ウド、カボチャ。さらに、つい先日まで叶野が店長を務めていた地域の直売所に置く品物として、また地域に新作物を根付かせようという意味も込めて、ズッキーニ、プチペール、ルッコラ、ウレイ、行者ニンニクなども作っている。

働き手は、叶野夫妻と後継者の幸喜(28歳)の三人。それに外国人の研修生を受け入れることもあるという。その労働力でよくぞここまでできるものだ。

悩みのなかにいた青春時代

叶野が通ったのは庄内農業高校の

自ら選ぶ道、困難も夫婦ならさらに面白し

定時制だった。コメ全盛の当時、この地域で水田の少なさは、農家としての貧しさを示す指標だった。父は出稼ぎに出ていたが、それでも叶野には定時制でも農業高校に行くことを命じた。

そして農繁期になると、自分たちの水田作業は早々に終わらせ、父親とともにほかの農家に田植えや稲刈りの出稼ぎに行くのが常だった。当時の農業高校には農繁休暇があった。親に言われてアルバイトのつもりで手伝いに行ったのに、父親は叶野には小遣いすらくれない。大きな水田を持つ農家が羨ましかった。貧しい農家として生きることが絶対嫌だと思った。

19歳で就職したのは水道工事会社。でも配属されたのは営業部門だった。技能を身に付けたいと思ってきた叶野は、住宅設備工事の会社に転職する。そこで職人としての修業をすることができた。やがてあれほど嫌だと思っていた農業に戻りたいと思うようになった。叶野は23歳になっていった。

叶野が農業に戻ってこようと思いついたのは、反発しながらもその指示に従うはかなかった父がルールを引いた、タバコ作があったからだ。農業を始めてすぐに、叶野は明美

⑥ 直畑のハウス栽培のハウス。⑦ 葉野の基幹作物のニンジン。⑧ 葉野の基幹作物のニンジン。⑨ 葉野の基幹作物のニンジン。⑩ 葉野の基幹作物のニンジン。



と結婚した。明美は鶴岡市の農家の育ち。やはり畑作が中心であるが町に引き売りをする農家の出身で、結婚前は東京で栄養士として働いていた。

1975年、まだ米価が上昇し続けていた時代である。水田を買おうにも売ってくれる人などいる時代ではなかった。逆に水田耕作面積が小さければこそ、叶野は水稲に見切りをつけることができた。タバコ作に退路のないチャレンジをしたのだ。農業を始めてすぐ、畑地基盤整備が進められていた羽黒山麓の畑1haを

初めて購入した。そして、今があるのだ。

筆者が知る限り、叶野は庄内地域で最も優れた畑作農家である。叶野が農業を学んだのは、タバコ作りを通してである。専売公社時代から日本たばこの農家指導を受けてきたが、それは技術面だけでなく、経営指導の面からも農業界一般の指導とは明らかに違っていた。生産者のなかに競争原理を持ち込み、商品生産というこの意味をしっかりと伝えていたのだ。叶野がそこで学んだものは多いはずだ。

親の背を見て後継者は育つ

後継者である幸喜もすでに麻由美（29歳）と結婚し、6歳のルキを頭にルアン（5歳）、ルルカ（1歳）の三人の子供の世話にかかりきりになっている。今回叶野家を訪ねた時には、麻由美は盲腸で入院中とのことであったが、その子供たち同様に根っから明るいお嬢さん育ちのお嫁さんである。

幸喜は高校卒業後、やはり本誌の読者である北海道北見市の小野寺俊幸の家で、春から冬まで研修に入った（現在、小野寺はJA常呂の組合長を務めている）。その年、旧常呂町は大きな水害を受けた。畑の収穫物が洪水で流され、タマネギが海の漁師の網で獲れるといわれるほどの水害だった。その様子を見て、幸喜が叶野に電話をしてきた。このまま世話になっていても良いものかというのだ。小野寺にとっては不幸な事件ではあるが、幸喜にとっては得がたい体験をさせてもらったのではないだろうか。単に農業の技術や経営を修行するだけでなく、己の困難だけでなく他人の困難に対していかに振る舞うべきなのかを、きつと小野寺なら教えたはずだからだ。

さあ、叶野さん。今度は貴方が他所の若者を育てる番だ。（敬称略）